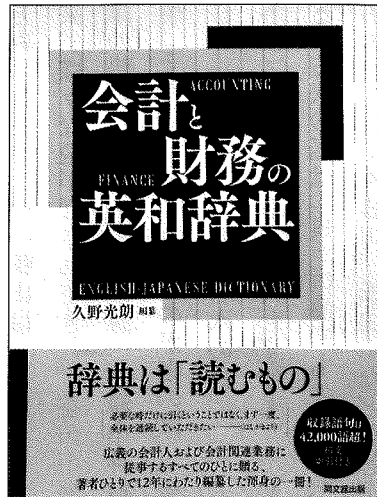


久野光朗編纂

## 『会計と財務の英和辞典』

同文館出版 二〇二二年

【ISBN 978-4-495-21013-7】



本書は、「辞典は『読むもの』」だといふ編纂者の信念に基づく渾身の一冊（中辞典）である。込められたのは「まず一度、全体を通読していただきたい」という思いである。「帯」で強調されているとおりである。ここでは、「序文」に述べられている基本的な姿勢や考え方を中心に、出版経緯をも併せて紹介したい。

まず、本書の想定する対象読者は、広義の会計人および会計関連業務に従事す

る専門的職業人である。すなわち、公認会計士、税理士のみならず企業内会計担当者および会計分野の研究・教育者、財務関係の専門的職業人ならびにそれら職業人を目指す研究・学習者までも含んでいる。

つぎに、収録対象とされた語句は、前記の関係諸分野（簿記・原価計算・財務会計・管理会計・監査）を中心としている。のみならず、税務会計・国際会計・環境会計・社会会計・会計（学）史・会計人諸団体・官庁会計をはじめ、情報分野や資金の調達・運用にかかわる経済・法律・統計の分野にまでおよび。また、グローバル時代の専門的職業人に必須の政治・経済・社会・哲学・思想などの基礎概念までも含めている。

さらに、先生自身の「遊び心に発する」語句をも含められている。すなわち前述の専門語句とは直接には関係しないけれども、格言や警句や箴言、外国語特有の「面白い」表現方法などである。曰く「：

あえて『明解（エレガント）英和辞典』を書名にしたゆえんでもある」という（ただし、当初予定されていたこの書名は諸事情で使用できなかった）。この「遊び心」は本書の大きな特徴だともいえる。

もつとも、先生は「専門領域以外の諸事項の収録」については批判があることも覚悟されている。「辞典」が『事典』的性格をも帯びることから「邪道だ」という主張の存在を認識してのことである。これには、『条理（Logos）』だけによるのではなく、『情理（pathos）』をも加えたものだといいたい」として正当性を主張している。

先生が辞典づくりに関心を抱いたきっかけは、E.L.Kohler, *A Dictionary for Accountants*, 2nd ed.(Prentice-Hall, Inc., 1957:『ローラー会計学辞典』)との出会いにある。初めて参加した学会（一九五八年、日本会計研究学会・一橋大学）の折に購入したのち一ヶ月足らずで読了し、会計全般に対する視野・展望が一気

に拓けたような「喜びを得た」という。

『コーラー辞典』は、Kohler自身が単独執筆した辞典として有名である。ただし、辞書編纂はチームを組んでやるものというのが一般的常識であろう。「辞典を一人だけで完成しようとするのが無謀に近い試みだ」というのである。これについては「帯」の末尾にも紹介されているとおり「編纂者自身もよく心得て」いる。

では「無謀な試み」に固執した理由は何か？先生は『コーラー辞典』を一気に読了した時に受けた感動のせいであり、それ以来持ち続けてきた心意気ということになる」という。この意を汲んで「必要な時だけに引くということではなく、まず一度全体を通読していただきたい。どうか引いて、読んで、さらに活用できる辞典にしていきたい」というのが切なる願いなのである。和文索引に一〇五頁も充ててあるのはそのためである。

執筆開始（二〇一三年）から刊行（二

二年）まで結果的には九年を要した。先生がよく使われた表現によれば「足かけ一〇年」になる。その前の資料収集期間七年を含めれば一七年（ご存命ならば満九〇歳）。七三歳で北海道情報大を退職した頃から作業を開始されたことになる。当時、研究会やその帰途で、「英語の略語収集を本格的に始めた」と聞いた記憶がある。

その後二〇一三年秋、「原稿を送るから自由な感想や意見でいい、手伝ってほしい」旨の依頼を受けた。要は「参考までに聞かせてほしい。ただし内容は最終的に自らが決める」ということだった。あくまでも「お手伝い」の立場でならと爾来、微力ながら関わってきた。手許に残る書簡によれば、当初の出版予定は同文館創立一二〇周年記念に合わせた一七年春。まさか完成前にゲラ再校正の途中でお亡くなりになるとは思いもしなかった。最後に、本書完成に向けての作業には、先生から直に伺った限りで二名の久野ゼ

ミ卒業生も加わっている。序文で謝意が表されているとおり、一九期金井光一氏が手書き原稿のデジタル化とそのゲラ校正で、および二期藤井建人氏がゲラ校正の過程に順次携われたことを付記しておく。なお、久野光朗先生は、本書刊行前の一八年二月二六日に逝去された。遺された最後の言葉は「いい人生だった」である。

片山郁夫（昭51年卒）